

春日部福音自由教会 2020年9月20日 11:00 中央会堂礼拝(同時配信)

聖書 新約聖書 マルコの福音書 9章 1節～8節

説教「隠された栄光」小野信一牧師

おはようございます。9月20日の主の日の礼拝をここ中央会堂で共にささげております。また今日もこの中央の礼拝の同時配信を続けて行なっていますので、家で礼拝をささげておられる方もいらっしゃるかと思います。映像と音声が届くことを願いながら、この礼拝堂にいる仲間達も、また家々で礼拝をささげる仲間たちも、神様が一つとしてくださるようお願い、共にみことばに耳を傾けて参りたいと思います。

それではともに祈りをささげましょう。天にいらっしゃる私たちの父なる神様。変わる事のない真実なるあなたの御名をあがめます。今日日曜日の朝、このように中央会堂に集まり、また三つの会堂に集まり、そしてそれぞれの家において、あなたの前に出て礼拝をささげております。神様、自分の体をあなたの前に携えてくる兄妹姉妹たち一人一人を、あなたが迎え受け入れ、喜び祝福して下さいますように祈ります。私たちがささげますささげものをどうぞお受けください。私たちはあなたのものです。あなたこそ私たちの造り主、私たちの救い主、贖い主であられます。今聖書のみことばが朗読されました。みことばをもって私たちにお語りください。主イエス様のお姿を見せてください。御声を聞かせてください。主イエスキリストの御名によってお祈りします。アーメン。

I 序

今年は4月の19日、復活祭の次の礼拝から同時配信礼拝として礼拝を行うことにいたしました。3月15日に合同礼拝と総会がありましたけれども、短くその総会を行うことになりました。それから半年が経ったこととなります。4月には教会の皆さんにメールでお知らせをしたり、週報に掲載したことの中で、感染爆発を防ぐため医療崩壊に近づくのを遅らせるために、“教会も社会の一員として協力しましょう”と呼びかけました。そして“一人一人が行動を変えましょう”ということと呼びかけました。そして4月の19日から集まらない礼拝としました。7月からは3会堂での礼拝を再開し今に至っています。一人一人が行動を変えることそれは本当にわずかかもしれません。でも“その積み重ねがこの社会を守ることになるのではないか”、医療崩壊が近づいているのではないかと言われていたその時に、“わずかかもしれない、でも1秒遅らせることができるかもしれない”というふうに考えました。一人ができることは本当に少しです。でもわずか1秒、何の影響も無いではないかと考えることもできますが、その積み重ねが合計タイムになります。その頃にあの大学駅伝の光景、そしてある大学の駅伝チームの合言葉というのでしょうかね、“その一秒を削りだせ”っていう言葉があったな—っていうのを思い出していました。一人の選手が走ります。その人が走るのは自分の区間だけです。わずか1秒縮めるということがチーム全体の記録を少しでも縮めることになる。その駅伝の光景、たすきを繋ぐ姿を今また思い出しています。

II イエスの変貌

イエス様にも仲間がいました。そしてイエス様にも先輩たちがいました。今日の場面はイエス様が山に登って姿が変えられた、違う姿になった、それを3人の弟子たちが見た、という場面です。「わたしをだれだと言いますか」、「あなたこそキリストです」と、ペテロが告白した後、イエス様は苦難の予告を始めました。それが8章の終わり、そしてそこから6日後のことです。「6日目に」と2節に書いてあります。高い山にイエス様は登られ、ペテロ・ヤコブ・ヨハネの3人だけを連れて行き、そこで姿が変わった、変えられたのです。

イエス様はここからは十字架への道を進みます。マルコの福音書は、8章でガリラヤ周辺の旅の一区切りがついて、大事な信仰告白があって、苦難の予告が始まり、9章から後半に入っていきます。十字架への道、新しい旅が始まります。その時に現れたのです。エリヤがモーセと共に現れた。そしてイエスと3人で語り合っていたというのです。エリヤとモーセ、イエス様の仲間です。ある意味では先輩です。この地上を生きているイエス様の人としての人生から見るならば先輩たちです。イエス様も先輩たちの歩んだ道、先輩たちのしたことに繋がることをしようとしています。先輩たちの歩んだ道に繋がる道をイエス様も歩もうとしています。そしてその大事な場面での大事な会話は何だったのか、弟子たちにその会話が聞こえたのかどうかは分からないのですが、大事な交わりを弟子たちに見せてくださいました。それも限られた弟子たち3人にです。ペテロとヤコブとヨハネは驚き感激し、多分喜び、そして舞い上がっていると言うか高揚感のような感じがしますが、「ここにいることは素晴らしいことです」と言って、「これをしましよ、これを作りましよ」と、提案のようなことを言うわけですが、同時にペテロは恐怖に打たれていて、自分が何を言っているのかがよく分からない、訳の分からないことを言ってしまうのです。雲が湧き起こります。彼らをおおいます。その中から声がします。「これはわたしの愛する子である、彼の言うことを聞け。これはわたしの選んだわたしの喜ぶ器である、彼から聞きなさい」、という天の声がしました。急いで見回すともはやイエス様だけ、もう誰も見えなかった、現れたモーセとエリヤは見えなくなっていました。

III 十字架への道

モーセもエリヤももう見えません。しかしイエス様の仲間として、また先輩として、また証人として、応援者として、見守っていてくれるということが分かります。リレーとか駅伝で言うならば自分の区間を先に走り終わった走者として、モーセやエリヤが見守っています。他にもたくさん。モーセとエリヤはその沢山の先輩たち、沢山の前の走者たちの代表でしょう。多くの先の走者たちが見守っています。時々姿を表すことがある。でも普通は見えません。モーセとエリヤの姿は見えましたが見えなくなりました。

イエス様はここから十字架の道を進んでいきます。十字架へと自ら近づいて行く。十字架を担う。自ら担います。十字架につけられます。自ら身を横たえます。自分の体を木の上に置きます。それは父の御心でした。父の選んだ器としてイエス様はここにいます。これからいよいよエルサレムへの旅、十字架の道が始まる。その時にエリヤとモーセが現れて話をし、それを弟子たちに見せてくださったのです。

イエス様がこれから踏み出そうとしていることは父のご計画、父の御心と言っても良いでしょう。例えばヨハネの 10 章では「父の命令」という言葉が使われています。イエス様は、「わたしは良い牧者、羊のためにいのちを捨てる」と言われましたけれども、17 節 18 節のところでは「わたしがいのちを捨てる、だれもわたしから命を取るのではない、わたしが自分からいのちを捨てるのだ、わたしはこの命令をわたしの父から受けた、父の命令として受け止めて、自ら、自分からしようとしているのです」と、言っています。父の命令、神の御心、御意思。その中をイエス様は進んでいきます。自分の負うべき十字架をイエス様も担って行かれます。その時にイエス様にも仲間がいたし先輩がいた。見守りと励ましの中、交わりの中を進み、担って行ったということです。

同じ父の大きなご計画の中でモーセはモーセの務めを果たしました。エリヤはエリヤの務めを果たしました。それぞれの時代に。そしてイエス様が今ここに立って、十字架に向かって進もうとしておられます。同じ主のご計画を実行する、たすきを繋ぐ仲間がイエス様にもいたのです。

IV 隠された栄光

イエス様の本当の姿、イエス様の本質とは何でしょうか。それは栄光に満ちたお方であるということです。しかしそのイエス様の本質である栄光は隠されています。人として生きた時、それは普段は見えませんでした。普通の人のように見えたのです。でもイエス様は隠された栄光を持っている方です。この時、短い時間、はっきりとそれが見えました。けれどまたそれは見えなくなりました。イエス様が復活した時にも、弟子たちは近づいてきた旅人が誰かを知らずに一緒に歩いて、そしてイエス様だ、と気がつく瞬間を迎えます。「分かった、すると見えなくなった」と、ルカの 24 章に書いてあります。私たちは今見えているものによるのではない、今見えていないものを見て、それを思い起こして生きていくように、神様は、その特別な風景を、光景を、ずっと見えるままにしておかれないのではないのでしょうか。見えないものを見て信じるように、見ずに生きていくように促されています。イエス様がもっていた栄光とは何でしょう。十字架前夜、最後の晩餐の後祈られた、イエス様の祈りがヨハネの 17 章に書かれています。ヨハネ 17 章の 5 節、「父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を」。イエス様は何と世界が始まる前に、創世記 1 章 1 節よりもっと前に、父と一緒にいられて栄光を持っておられました。しかしその栄光を後ろにして、地上に現れた。人間として生まれて生活してきた。「父よ、今あの栄光を現わしてください」と、十字架を前にしてイエス様は祈ったのですね。イエス様は父と共に栄光を持っているお方、輝いているお方です。でもその栄光は隠されていました。時々見えたのですね、イエス様の地上の生涯の中で。

例えばイエス様が洗礼を受けた日に聖霊が鳩のように降るのが見えて天から声がしました。今日の箇所のみことばと似ていますね。「あなたはわたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ」という声がしました。今日のみことばと同じように天からの声がしたのです。不思議なことでした。そしてこの日、山の上で、変容の山の上で姿が変わって、「これはわたしの愛する子である。彼に聞きなさい」という声がまた聞こえました。しかしその栄光の姿はまた見えなくなって普通の人間の姿に戻ったのですよね。

十字架の日、惨めな姿でしたが、ある人にとっては栄光が見えたということでしょう。見た人はわず

かだったかもしれません。例えば百人隊長がその姿を見て「この方は真に神の子であった」と見たのです。そして復活の日、イエス様は現れて見えた、そしてまた見えなくなった、ということがありました。時々見えたのです。でも普段は隠されています。今もイエス様の本質は私達の目には見えません。この肉の目には見えない。今も隠されています。しかしそれが来るべき日にはっきり見えます。その日が来るのです。イエス様の真の姿、イエス様の本質、本当の栄光の輝きはこういうものだったのだ、ということを知る日が来ます。私達はまだ見た事がありません。それを見て驚くでしょう。喜ぶでしょう。きっと舞い上がるでしょう。賛美するでしょう。まだ見ていないイエス様の栄光は隠されています。

V 弟子の本当の姿

イエス様の本質が、隠されているけれども栄光に輝く姿であるのに対して、今度は一方、弟子の本質、弟子の本当の姿とは何でしょうか。弟子のあるべき姿とは何でしょうか。ここで今日のみことばの中で7節のみことばに心を留めたいと思います。声がしました。「これはわたしの愛する子である、愛する息子である、彼に聞きなさい、彼から聞きなさい」。弟子の真の姿、あるべき姿とは、イエス様から聞くということです。イエス様の言うことを聞く、ということです。新約聖書旧約聖書には聞くという言葉が何度も出てきます。旧約聖書でも特に重要な言葉のひとつですね。「聞け、イスラエル」「シェマーイスラエル」、という言葉がありますが、シェマー、聞くという言葉は、普通に“聞く”と訳す言葉でありますけれど、その聞くという言葉の中に既に、聞いて従う、聞いて行う、という意味が含まれているのです。聞きましたということは、聞いてそれを行いましたという、本来はそういう意味なのです。ですから簡単に私たちは、みことばを聞きましたということはできません。聞いて流してしまう、聞いて忘れてしまう、では聞いたことには本当はならないのです。行って初めて聞いたということになります。「彼の言うことを聞きなさい」。私達イエス様を信じイエス様に従って行こうとする者の、まずすべきことはイエス様から聞く、ということです。イエス様の言葉を聞いて、それを行なっていく、ということです。今日の朗読された箇所、1節は別として、その後のところにはイエス様のことばが出てきません。イエス様の姿が変えられ、受け身的に行動しているように見えます。でもイエス様が語った全てのことばを私たちは聞いて行う、それが弟子の本質です。

VI 神の国の到来

ちょっと1節に戻りますけれど、これはイエス様のことばですね。「神の国が力をもって到来しているのを見るまで、決して死を味わわない人たちがいます」。この神の国が力をもって到来するってイエス様が言われた、これはいつのことを指しているのでしょうか。「神の国が力をもって来る時が来るのです」。やがてその時が来ます。しかし「それを見るまで決して死なない人がいる」というのはどういうことなのでしょう。神の国が来る、これはイエス様が語られたことば、約束、預言であると言っても良いのですが、神様の預言はどの未来のどの時点を目指すか、いろんな預言にも解釈があると思えますけれども、多くの預言は未来の一つの時点だけを指すのではなくて、一つの時点、二つあるいはそれ以上、いくつかの未来の時点を目指しているということがあります。

一つは近い将来にその実現を見るということなのでしょう。例えば聖餐式で読まれるみことばはマタイの 26 章ですけれど、マルコでは 14 章の 25 節に、「神の国で新しく飲むその日までわたしはぶどうの実から作ったもの飲むことはありません」と言われています。ですから神の国でイエス様とイエス様を信じる弟子たちが、一緒に飲む時が来ると言うのです。それは遠い未来の、イエス様が再臨してやってくる遠い未来のことを指しているようにも理解することができますが、一方まもなく来るその時を指しているとも言えるでしょう。今日の箇所で言いますと、それはつまりイエス様が三日後によみがえるという、三日後のよみがえりを指している。今日のところは 6 日後ですよ、6 日後。「神の国が力をもってきているのを見るまで死なない人たちがいる」。3 人がモーセとエリヤとイエス様を見たというのは、神の国が来ているのを見たということが言えるでしょう。ただしそれは短い時間見えただけ、垣間見ただけであって完全に表されたものではありません。彼らは、3 人は見たのです。一部分を見たのです。でもその後もっとはっきり見えるようになります。完全な実現の時が来ます。「神の国が力をもって来る」。主イエスはその神の国の王である。その預言、神のご計画は、段階を追って実現していきます。今もその進んでいる途上です。私たちもその間にいるのです。3 人が垣間見たイエス様の栄光の姿、それがやがていつか完全にフルに表される時が来る。それはいま私たちがここにいる、2020 年の時点よりも先の未来です。いつかその日が来る、私たちはその間にいます。私たちはその未来を信じて待っています。神の国が力を持って到来する、完全に実現する。この今の世、今の時代が終わって新しい時代がやってくる。新しい世がやってくる、新天新地がやってくる、その日が来るのです。

Ⅶ 許された『時』を生きる

ヤコブ、ペテロ、ヨハネは一部を、少しを見ました。栄光を隠す主イエスの御業は今もなお続いています。ペテロとヤコブとヨハネのことですけれども、なぜこの 3 人だったのでしょうか。この 3 人っていうのは 12 人の中ではどういう存在だったのでしょうか。12 人いたのですけど、やっぱり一番身近に 3 人がいたようです。例えばゲッセマネに連れて行かれたのもこの 3 人でした。12 人全員じゃなかった。一緒に祈る時に 3 人が近くにいました。ペテロは 12 人の中心でありリーダーであり、いつも最初に出てきて行動し、また話しています。今日の箇所でも、「先生私たちはここにいることは素晴らしいことです」と言っています。ヤコブはどういう人でしょうか。ヤコブはヨハネの兄弟ですけれども 12 人の中で最初に殉教した人です。使徒の働き 12 章。捕らえられて殺されます。ヤコブを捕えて殺した人たちは、民がそれを見て喜んだのを感じてペテロも捕えました。しかしペテロは助け出されたのですよね。神様はペテロを助け出すことが出来た。ヤコブも助けることが出来たでしょう。でもそうされませんでした。最初の殉教者となります。ヨハネはどうでしょうか。ヨハネはヤコブの兄弟です。ヨハネは 12 人の中で最も若かったと考えられています。そして一番最後まで生き残ったと伝えられています。地上にどれだけいることになるかっていうのはそれぞれです。分からないのです。なぜヤコブはあの時にこの世から取り去られたのか。なぜペテロの命は助けられて永らえて、世に留まったのか。ヨハネは生き残った。何故だかが分かりません。この世にいる時間、短くても長くてもいいのです。ただ自分に許された時を生きるのです。この 3 人のことからそのことを教えられます。

今日は8節まで朗読していただきました。次の段落の9節から13節までが一つの続きになっていますけれども、山を下りながらの会話が9節から書いてあります。9節でイエス様は、「今見たことを誰にも話すな」と言いました。「人の子が死人の中からよみがえる時が来るまでは話すな」と言われたのです。いつもイエス様の言いつけを守れない人たちは守ったのでしょうか、どうなのでしょう。はっきり分かりませんが、多分話さなかったのだらうなと思いますし、ちょっと凄すぎて、怖すぎて話せなかったかもしれません。あるいは話しても信じてもらえなかったり、分からなかったらうし、という風にも思います。おそらく復活後彼らは話したでしょう。「あの時言われた、復活の時まで話すなと言われた」、「今復活が実現した、あの時こういうことがあった」と、12弟子の残りの人達に、70人に、120人に、3000人の加わった仲間に、この日見た光景は伝えられたでしょう。そして多くの弟子たちによって語り継がれ、今に至るまで伝えられています。神の国が来るのだ、イエス様こそ、その王なのだ。私達も同じことを今日信じています。信じて待っています。弟子であるということはイエス様の言うことを聞くことである、それが弟子の本質です。

Ⅷ たすきを繋ぐ

さて信じる主イエスの弟子である私たちにも仲間がいるということ、先輩がいるということを感じたいと思います。イエス様は先輩たちからたすきを受け取って、バトンを受け取って、十字架の道を行きました。そしてそれを3人には見せたのです。12人に自分がこれからしようとしていることを伝えて十字架にかかっていきました。イエス様からバトンが、たすきが、3人に渡され12人に渡され、そして70人、120人に渡され、私たちにも渡されているのです。イエス様でさえもチームの一員として、ひとつの神のご計画を担っていた。駅伝のようだと思いますって言ったのですが、別のスポーツで、野球で言えばですね、大事な場面がやってくる。そこでタイムを取ってピッチャーのところ選手が集まり、あるいはベンチからコーチが集まって、もう選手を引退したコーチがやってきてマウンドに集まって、話をしている男達みたいな感じがします。「いよいよだな」、「さあ時が来た」、「頼むぞ」、「いつも見ているよ」と、声をかけて下がっていく。ピッチャーがまたボールを投げる。イエス様がそうやってご自分の歩む道に向かおうとしているようにも思えます。イエス様でさえもある意味ではチームの一員として、神のご計画を担う流れの中で、皆でひとつのご計画を担っていました。私たちもそうです。一人ではありません。チームで担っています。私たちが走っているレースというのは短距離走、個人競技というよりは、長距離の長時間のレースであり、人生を通して走り続けるレースであり、また一人の人の人生では走り通すことができないほど長い、何百年何千年と続く長時間の団体競技、リレー、長い長い駅伝のようなものに近いと思います。ずっと続いているのです。モーセからエリヤに、イエス様に続き、ペテロ、ヤコブ、ヨハネから70人、120人、3000人に続き、その後パウロたちとか。この福音書を書いたマルコ、ペテロから聞いて書いたのでしょう。そしてデモテとかテトスという世代が続き、そして新約聖書の時代の後、諸教会の先輩たちがいて、そうして教会の世界の宣教の歴史の中でアジアからヨーロッパに福音が伝わり、ローマに行きそこから国々に行き、そこから世界中に広がり、またアジアにまでやってきて、日本には1549年にザビエル先生がやってきて、そして世界中の教会の

先輩たちのリレーが続き、今私たちにもたすきが渡されています。同じ神の国の到来に向けて同じたすきを繋いでいます。私たちもその一部です。チームの一員です。神様の大きなご計画の一部とされて、今一人一人が、神様によって触れられて変えられつつあり、そして神様によって用いられつつあるのです。それは素晴らしいことです。ペテロが訳が分からなくなって、何を言っているのかわからなくなって、「ここにいることは、私たちがここにいることは素晴らしいことです」と言いましたけれども、私たちがこのモーセ、エリヤ、イエス様、弟子たち、諸教会の先輩たちから繋がるたすきを今受けているということを思う時に、「なんと光栄なことだろうか、ここに私たちがいることは素晴らしいことだ」と言いたい思いになります。一人ではないのです。先輩たちがいて仲間がいるのです。教会というのは、特に日本の教会は、素晴らしい存在、素晴らしい使命を持っている、という風に一見見えないかもしれませんが。しかし光栄ある務めと立場を与えられています。私たちがペテロたちと同じように、喜びと恐れに包まれて言いたいと思うのです。「私たちがここにいるのは素晴らしいことです」と。ここにいること、この礼拝の場に、この教会にイエス様と繋がっていただけること、信じる仲間がいること、信仰の先輩たちがいること、素晴らしいことです。そして私たちが最後ではありません。後輩たち。先輩がいれば後輩たちもいて、次に走る人たちもいるのです。「ここにいるのは素晴らしいことです」。そういつとも言えるようでありたいと思います。「素晴らしいことです、嬉しいです、だから私達も何かしたいです」と言って、思って、何をしたいのかわからなくなり、的外れな願いや行動や言葉になる時があるかもしれない。ペテロのように。それでも、「ここにいることは素晴らしいことだ」と言いたいと思うのです。何をしたらいいのかわかすイエス様が教えてください。イエス様から聞けば良いのです。

「これは我が子愛する息子である。彼に聞け。」突然、雲の中から声がして見回すと、もはや誰も見えず、見えるのはイエス様だけになっていました。イエス様しか見えなくて良いのです。イエス様だけに聞けば良いのです。そのイエス様がモーセやエリヤと繋がっています。モーセやエリヤは先輩たちでありますけれども、同時にある意味ではモーセは預言の書を与えてくれた存在であり、エリヤは預言者たちの代表であると言っても良いでしょう。律法と預言者。旧約聖書を二人は象徴しているとも言えるでしょう。一方新約聖書はペテロやヨハネ達が伝えたこと、それらが書き残されたものです。旧約聖書が主イエス様を指し示し、新約聖書が主イエス様の人格と行動とことばを伝えています。ですから私たちは聖書に聞くことによって、耳を傾けることによって、ただ主イエスに聞くということが出来ます。聖書を聞き実行することが、主イエス様に聞き従うことになるのです。それぞれが自分の時代を生きました。モーセもエリヤも、イエス様もペテロもです。そして私たちが。一つみことばを読みみましょう。使徒の働き 13 章、ダビデのことがここに語られています。パウロが語ったことです。使徒の働き 13 章の 36 節。「ダビデは、彼の生きた時代に神のみこころに仕えた後、死んで先祖たちの仲間に加えられ、朽ちて滅びることになりました」。ダビデは自分の世代、自分の時代に生きて、そこで神の御心に仕えたのです。そして世を去っていきました。私たちが同じです。自分たちの世代に自分の生きる時代において神の御心に仕えて、そして世を去っていくのです。神の御心、神のお心、ご計画に仕えるのです。なんとという光栄なことでしょうか。この世を、限られた時間生きる意味はここにあります。限られた時間だからこそ精一杯全力を尽くします。“その一秒をけずりだせ”という合言葉のように、

今たすきを渡されている私たちが、私たちの走りが、チーム全体の記録をその一秒を左右する、そのことを喜びと恐れをもって受け止めます。私たちは一人ではありません。共に歩む仲間がいます。先輩たちがいます。私たちそれぞれにどんな先輩たちがいたか思い起こして見ましょう。自分の先輩。身近なところにいる先輩。世を去っていった先輩。そして遠い新約聖書旧約聖書の先輩たちのことも思い出してみましょう。自分がその流れの中でどこにいるのか。神様の大きなご計画の中に、ここに私がいるのだ、ここに私たちがいるのだ、自分の姿を見つけてみましょう。そして私たちだけでなく後輩たちの姿もその絵の中に見つけましょう。見ましょう。最後のゴールのテープを切るのは私たちではないかもしれません。私たちもまた誰かにたすきを渡して走り終えるのかもしれない。次のランナーも大事です。先輩たちがいるだけでなく、後輩たちがいるのです。この国にあってキリストの弟子として生きるということをする時に、イエス様が、「小さき群れよ、恐れるな」と、言ってくださっていることばを思い出します。この時代にこの国にあってわずかなキリスト者たちを選んで、神の国の大きなご計画の一部を担う者としてくださいました。

この国のいわゆるキリシタンの迫害のことを考えますと何年間それは続いたでしょうか。250年でしょうか。例えば1587年から1873年までとか、1614年から1859年とか、色々な区切りを考えることができるでしょう。245年とか280年とか、禁教が続いたわけです。そしてお互いがお互いを見張り合うような社会を作って、長い時間を過ごしました。まだそれに縛られているところがあるように思います。もし250年ならば、開国からあるいは禁教が解けてから250年を私たちは目指したいと思います。開国からだったら、今年2020年で161年ですね。あと89年が経つと250年になります。あと80年は自分はこの地上では生きられないなと私は思いますし、ここにいる多くの人はそうではないかと思えます。まだ10代の人もいます。今10代の人達、そしてまだ今10歳にならない人たち、その後生まれる人たち、そういう人たちが、80年後に、主がまだ来られていないならばですが、地上に生きているのかもしれない。そういう世代の若者たち子供たちがいます。250年キリスト教を禁じたこの日本の国の宣教は250年経ったらどこまで進めるでしょうか。その次の世代、次の次の世代のために、私たちは何を残せるでしょう。世界の宣教、神のご計画の中で、それと同時にこの国の宣教の歴史の中で、私たちはたすきを受け継いでいます。仲間がいます。先輩がいます。そして後輩たちもいるのです。渡されたたすきを握り、主イエスの声を聞いてそれを行なっていきましょう。

お祈りをささげます。天の父なる神様。主イエス様の栄光は隠されています。しかしそれが現わされる時がきます。これまで時々、部分的に現わされたその栄光が、完全に現わされる時が来る。私たちはその日を待ち望みます。そしてそれまでの間、この地上に生きる間、イエス様の言われることを聞いて、イエス様から渡されたバトンを、たすきを受けて、精一杯に走りたいと願います。私たちに先輩達がいきました。先輩たちから受け取ったものを大切に、そして次の世代に大切に渡していくことができるように、どうぞ導いてください。主イエスキリストの御名によってお祈りします。アーメン。